

小学校英語活動における文字指導の実践について — 四技能の統合を目指して —

山本 淳子^{†1} 仲川 浩世^{†2} 鈴木 輝暁^{†1}

2011年度から正式にスタートした小学校5年生、6年生を対象にした英語活動では、聞く・話す活動が中心で、文字指導（読む・書く）の要素は極めて少ない。国際化に対応した人材を育成するためには、英語教育導入時から音声と読み・書きを有機的に結びつけて習得させることが望ましい。ただし、子どもの発達段階を考えると、中学校の前倒しのような形ではなく、彼らの興味・関心に合った、遊び感覚で楽しみながら学べる環境を整えるべきである。現在英語指導を行っている小学校で、やりたい学習形態について68人の小学生にアンケートをとり、その因子分析を行った。「遊び感覚」に関わる因子で、最も影響度が高かったのが、「映画で表現を覚える」であった。「国際交流」に関わる因子では、「ポスタを作る」が最も影響度が高かった。小学校6年生を対象にこれらの活動を中心とした文字指導実践を行っている。

Teaching Reading and Writing in EFL Primary Classroom in Japan - Methods to Integrate the Four Skills -

Junko YAMAMOTO^{†1} Hiroyo NAKAGAWA^{†2} Teruaki SUZUKI^{†1}

Japanese English education for 5th and 6th grade elementary school children is focused on spoken language skills. To better prepare children for the higher educational and fruitful life in the increasingly internationalized world, however, young people need to be equipped with the four English skills of listening, speaking, reading and writing. To determine what type of learning style will have the most influence on children's minds, the authors conducted factor analysis using a sample of 68 children. "Fun learning" factors, like "Learning English through DVD movies" and "International exchange" like "Making posters" turned out to be the most influential. The authors would like to show the methodologies and the results of the research.

1. まえがき

2011（平成23）年度から小学校5年生、6年生を対象にした英語活動が、全面実施となった。各学年、年間35単位時間、週1コマ相当があてられている。指導要領によると、英語活動の目的は、「…積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」とある。また、「…音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」とある。要約すると、英語のコミュニケーション能力の素地を養うためには、音声面を中心とし、文字については補助的に扱われることが望ましいと、文部科学省では捉えていると考えられる。しかし、インプット、receptive knowledge（受容的知識＝reading, listening）を与えることで、初めてアウトプット、productive skill（産出的スキル＝writing, speaking）を習得させられること、また、これら四技能は密接に関わっていることを考え合わせれば、四技能をバランスよく指導することが望ましいと考えられる。その際には、小学生にとって過度の負担にならないよう、かつ、高学年の知的欲求を満たす指導方法を考える

こととした。

2. 指導実践

地域の小学校の協力を得て、四技能の統合を目指した英語指導の計画・実践を行った。5年生（2クラス）の担任の先生とともに、四技能を統合した英語活動計画をたて、実施した。指導要領の一部に「…国際理解にかかわる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること」とあることから、国際交流を取り入れつつ、子どもの知的好奇心に合うこと、過度の負担にならないこと、などに留意し、活動内容を考えた。

実施期間：2011年4月～

対象：新潟県内小学校5年生2クラス68名

内容：香港の小学生との国際交流の他、四技能を伸ばすための活動を取り入れ、どの活動が子どもたちに最も受け入れられたかをアンケートを通じて検証する。

実施した活動の概要は以下のとおりである。

1. 歌やゲームで英語の表現を覚える
2. 英語を書いて表現を覚える
3. 海外の小学生に手紙を書く
4. 海外の小学生からの手紙を読む
5. 文化祭で英語活動について発表する
6. 映画で表現を覚える

^{†1} 新潟経営大学 経営情報学部
Faculty of Management Information, Niigata University of Management
^{†2} 関西外国語大学短期大学部
Kansai Gaidai College

7. 英語のポスタを作る
8. 絵本を読む

3. アンケートの実施

これらの活動を35単位時間の中に取り入れ、約1年後に、上記8種類の活動(8つの質問)について、これからもやりたいかどうかについて、アンケートを実施した(2012年3月7日, 68名)。回答選択肢(5段階)の内容は以下のとおりである。

1. とてもやりたい
2. やりたい
3. どちらでもない
4. あまりやりたくない
5. やりたくない

それぞれの質問に対する単純集計結果は図1のとおりである。

3.1 アンケートの分析

本アンケートの回答は、5段階の順位データであり、大小関係(順序)のみ意味を有する。8つの質問の変数を要

約するために主成分分析を行った。本来、主成分分析は量的データに適用されるが、質的データである本アンケートの5段階の回答を量的データであるとみなして実施する。この後、抽出された因子数を用いて、質問1から質問8までの背景にある共通因子を、因子分析により探る。

(1) 主成分分析した結果を図2に示す。固有値が1より大きくなる因子のみを採用とし、因子数を2とする。

(2) 因子数を2として、バリマックス回転による因子分析を行い、並べ替えられた結果を表1に示す。質問6, 質問8, 質問2, 質問5および質問1は因子1で大きな正の負荷量を持つため、質問内容からこの因子1には「遊び感覚」というラベルを付けることとする。

質問7, 質問4および質問3は、因子2で大きな正の負荷量を持つため、質問内容からこの因子には、「国際交流」というラベルを付けることとする。

これらの数値から、「遊び感覚」においては、質問6の「映画で表現を覚える」の数値が最も高く、「国際交流」においては、質問7の「英語のポスタを作る」の数値が最も高かったため、これらがそれぞれにおいて最も大きな影響を与えている項目であることがわかる。

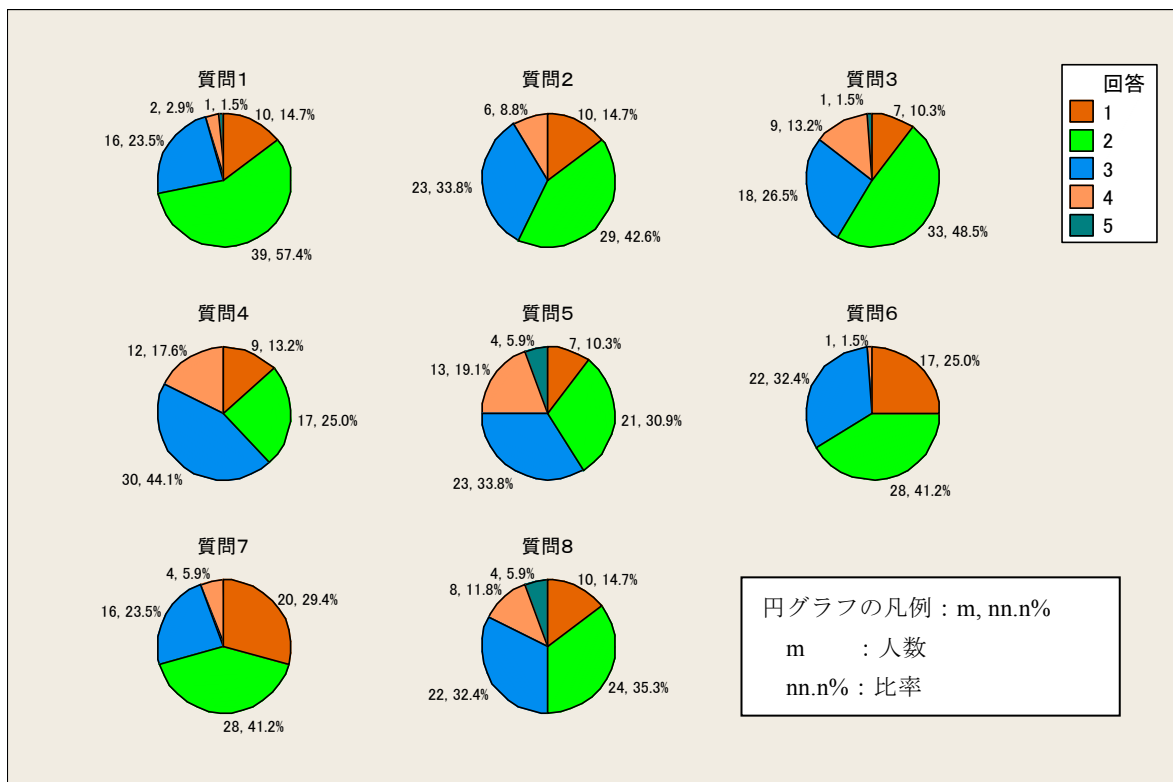


図1 単純集計結果

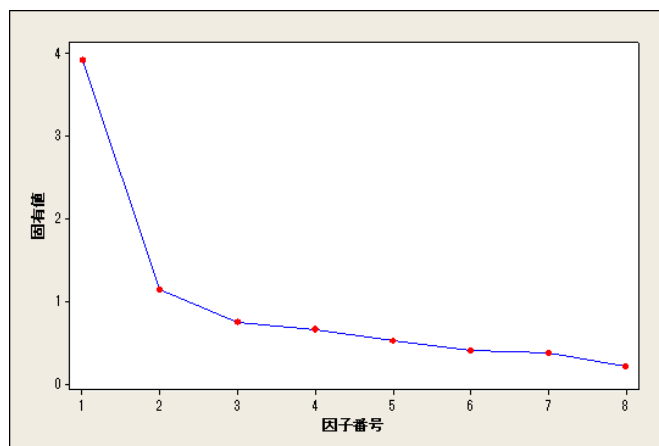


図2 8つの変数の固有値プロファイル

表1 並べ替えられた回転後因子負荷量と共通性

変数	因子1	因子2	共通性	ラベル
質問6 映画で表現を覚える	0.784	-0.087	0.623	遊び感覚
質問8 絵本を読む	0.714	0.388	0.661	
質問2 英語を書いて表現を覚える	0.705	0.229	0.549	
質問5 文化祭で英語活動について発表する	0.693	0.346	0.600	
質問1 歌やゲームで英語の表現を覚える	0.610	0.454	0.579	国際交流
質問7 英語のポスタを作る	0.061	0.849	0.724	
質問4 海外の小学生からの手紙を読む	0.200	0.757	0.613	
質問3 海外の小学生に手紙を書く	0.392	0.751	0.717	
分散	2.672	2.393	5.065	—
分散 (%)	0.334	0.299	0.633	—

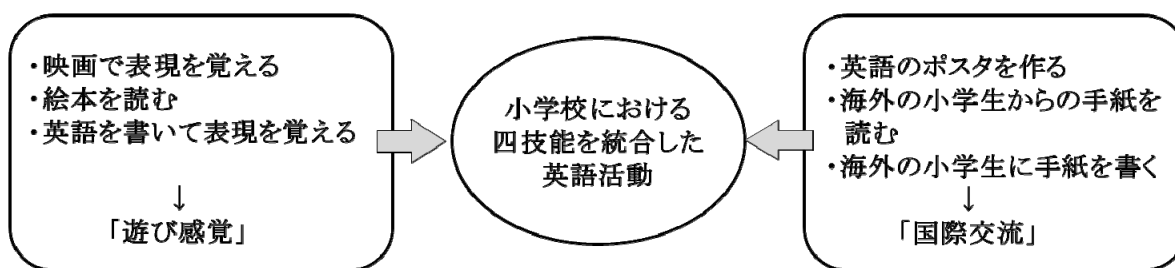


図3 小学校英語活動実践モデル

この結果から、小学校で四技能をバランスよく指導する際に、「遊び感覚」や「国際交流」の要素を取り入れる方法が効果的であると考えられる(図3)。

4. ICTを活用した英語活動

「国際交流」と「遊び感覚」の要素を取り入れた英語活動を進めていく上で、ICT (Information and Communications Technology: 情報通信技術) を活用することは、効率面と、

子どもを飽きさせず、活動に集中させることができるという観点から、意義があると考えられる。教科書や絵カードなどアナログの素材をプロジェクタやTVに拡大提示できる、教材提示装置や電子黒板などが、各自治体で採用されている[1]。これらを考慮し、以下のことを計画、実践していく。

4.1 DVDレターの作製・交換

「国際交流」を行う上で、手紙、ポスタ交換に加え、自国の学校や文化を紹介するDVDを交換する。グループご

とにテーマを決めさせ、発表の様子をビデオに収めてある。テーマは、「Our school (私たちの学校)」、「School lunch (給食)」、「Kamo's festivals (加茂市の祭り)」などと多岐にわたっている。発表する際には、英語でいえるところは英語で、英語でいえない説明などは日本語でいわせる。この動画を動画編集ソフトで編集する。その際、日本語の部分に英語の字幕を入れた。必ずしも、先方の小学校に同じことを期待することはできないが、DVDを作るまでの過程で、多くの英語を話すことができ、またできた DVD を観ることで自分や仲間の話す英語を聞く活動も可能となる。

4.2 Google ビデオを活用した国際交流

ビデオに撮った動画を Google ビデオにアップロードすることも予定している。この方法であれば、DVD に動画を焼く必要もなく、[閲覧者]を限定することで、観てもらいたい相手にだけ、公開することが可能になる。Google ビデオ上で、字幕を挿入することも可能である。ネットワークの環境が整っていれば、双方にとって手軽に、相手の様子を観ることができる。

4.3 ネットワーク回線を使う英語活動

今後の更なる構想は、図 4 に示すとおりである。ウェブカメラを利用した交流、eメール交換に加え、「遊び感覚」の要素として DVD 動画学習システムを加えている。

DVD 動画学習システムに関連して、これまで、大学生を対象に DVD の動画とキャプションを同期させた学習プログラムの実践を行い一定の効果を上げた[2]。これを基本にして、小学生を対象とした、ネットワーク回線を使う DVD 学習システムを開発する(図 5)。このシステム開発のために、「Hi, Friends 1」「Hi, Friends 2」(文部科学省)を参考に、小学校 5・6 年生に適用可能な語彙・文法事項のデータベースを築く。また、児童向け映画(著作権の切れたもの)を選定し、語彙・文法事項にあてはまるセリフがあるシーンについて、そのチャプタ番号、開始・終了時刻に関する記録をとる。

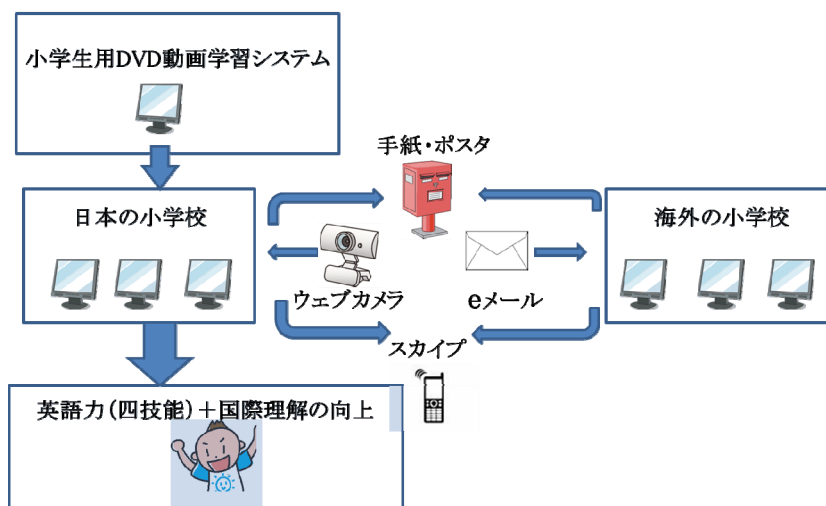


図 4 ネットワーク回線を使う英語活動の構想

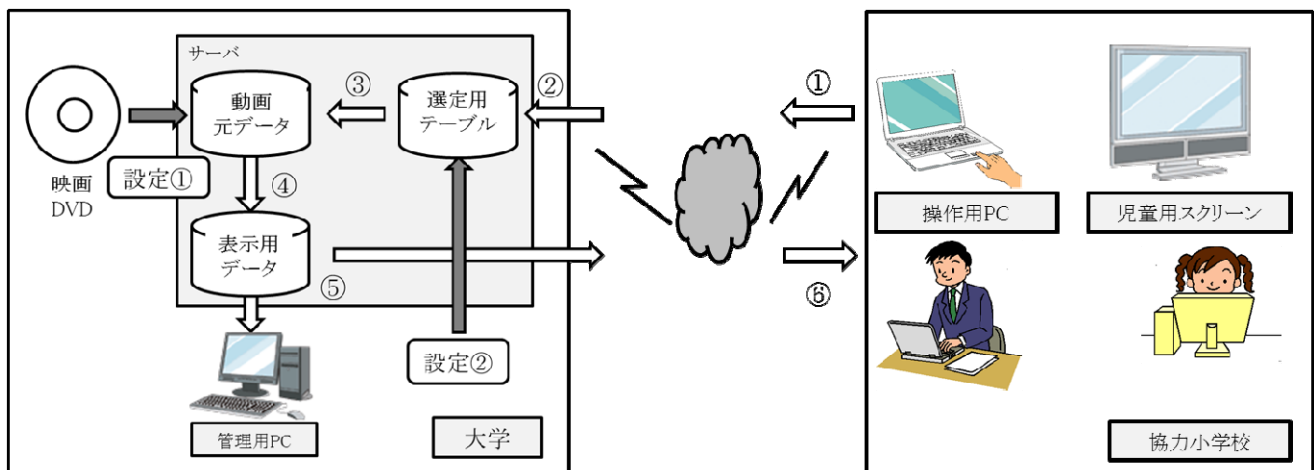


図 5 ネットワーク回線を使う DVD 学習システムの概要

図 5 中の流れは、以下のとおりである。

設定①：教材となる映画 DVD を、本研究で開発するサーバに動画データとして取り込む。

設定②：操作用 PC からのリクエストに答えるために、以下の項目を選定用テーブルに準備しておく。

「検索キー、例文、動画開始位置、動画終了位置」

(リクエストした単語が、検索キーに合致したとき、動画開始位置と動画終了位置から求めた動画元データを抽出し、表示用データへ送る。そのとき、例文を付加する。)

【稼働時の動き】

- ① 協力小学校の教師は、教えたがキーワードを操作用 PC に入力する。
- ② 入力されたキーワードはネットワーク回線を通して大学のサーバに送られ、処理を開始する。
- ③ このキーワードが選定用テーブルを検索しにいき、ヒットすれば、求められた動画開始位置と動画終了位置から動画元データに対して該当動画を探しに行く。
- ④ 該当した動画部分は、選定用テーブルに保有する例文を付加し、ともに表示用データとして一時保管される。
- ⑤ 表示用データは、ネットワーク回線を通して、協力小学校へ送られる。併せて、大学の管理用 PC にも表示されるので、筆者らも同時に画面を見ることができる。つまり、遠隔地教育や万一の障害対策に有効となる。
- ⑥ 協力小学校では、教師の立ち会いのもと、児童に表示された動画と例文を見せながら解説を行う。このことにより、指導したいキーワードを使用した例文が示されるとともに、その例文を使った映画教材が利用できる。

費用面の問題があるので、事業者と相談しながら実現に向けて準備を進めていきたい。映画の使用に関しては、著作権の問題が生じる。子どもたちにとって魅力的な映画で、著作権の問題をクリアできるものを探していかななくてはならない。それまでは、ALT (Assistant Language Teacher)、ネイティブスピーカの講師の協力を得て、教材動画を編集、作成したものを利用する。

5. むすび

小学校の英語活動において、コミュニケーション能力を伸ばすために、文字学習を導入して、四技能をバランスよく指導することは重要である。年間 35 単位時間の中で、可能な限り四技能を統合した活動を行わせるために、ICT は便利なツールである。小学校の担任の教師が英語教員の資格を持っていなくても、ICT 技術があれば、正しい発音、

イントネーションで英語を提示することが可能になる。国際交流においては、従来の手紙、ポスタ交換に加えて、ネットワークを利用することで、実際のコミュニケーションに匹敵する交流ができる。今後も、ICT を十分に活用した実践を計画し、実施していく。

謝辞 本研究の一部は、JSPS 科研費 24520715 の助成を受けて行われた。

参考文献

- 1) 山本淳子: 小学校英語教育における ICT の活用について、新潟経営大学紀要, 第 16 号, pp.111-121 (2010)
- 2) Yamamoto, J., Okura, T. and Watanabe, Y.: Class Research on Learning Methods in Movie-based Computer Assisted Language Learning, メディア教育研究, vol.3, No.2, pp.125-136 (2007)